

## 仏教を学ぶということ

兵 藤 一 夫

皆さんは今年新たに大谷大学仏教学会に入会されましたが、学会を代表して心から歓迎します。新入会員の皆さんを歓迎するために何かお話をしなければならぬことになり、さてどのようなお話をしようかと考えたのですが、なかなか適切なテーマが見つかりませんでした。そこで、皆さんはこれから四年間この大谷大学で仏教を学ぶことになるわけですから、それを始めるに当たって、仏教というものがどんなものか、そして仏教を学ぶということが皆さんにとってどんな意味があるのか、ということについて私が考えていることの一端をお話することがよいのではないかと思います。これから皆さんが仏教を学んでいくことに幾らかでも役立てばと考えております。

今日は「仏教を学ぶということ」という題で話をするにしましたが、大きく四つの項目、

- 一 大学で学ぶ意味
- 二 仏教は他の宗教とは異なる
- 三 仏教における真理とは？
- 四 仏教を学ぶとは？

に分けてお話していきます。

仏教学科に入ってから来た皆さんは、もちろん、仏教を学ぼうという気持ちを持っていることと思います。しかし、中には仏教というものがまだよく分からないという人もいるのではないでしょうか。仏教を学ぼうという場合、仏教も宗教の一つとして捉えられますから、そういう宗教の一つとすれば、宗教を学ぶことでもあるわけです。その場合、他の宗教を学ぶのと同じであるのか違うのか、もし違うとすればどのように違うのか、などについてあらかじめ知っておくことは大切なことです。仏教は宗教の一つではありますが、一般に宗教としてイメージされ考えられているものとは内容が違っている部分も多いと思います。仏教の特色を踏まえて、どういうことに注意しながら仏教を学んでいけばよいか、仏教を学ぶ意味は何かというようなことについて話ができればと考えています。

## 一 大学で学ぶ意味

「大学で学ぶ意味」と少し大仰に示しましたが、これはこういう大きく見たところで仏教を学ぶ意味を考えて欲しいと思ったからです。ここでは「異化」ということばを手がかりにして考えてみます。この「異化」ということばは最近いろいろなところで話題になっていますから聞いたことのある人もいるでしょう。これは、ドイツの劇作家ブレヒトという人が劇作上の中心概念として言い始めたことばのようです。「異化」とは、普段の私たちの身の回りのこととは見慣れたものですから、そこには特に新しい感激とか、新しい発見というものはないのですが、そこに別な新たな視点を持ち込むことによって、それらがこれまでとは異なったものとして見えてくるということです。そのためには、私たち自身が少し気をつけて、意識的に異なった視点をわざと持つてみる、あるいはこれまで知らないことに出遇って、「あっ、こういう見方もあるのか」ということを知った時に、それを自分の中に取り入れて、それによって物事を見てみるのが求められます。そういうことを行なうことで、これまで自明なものとか馴染みのものとはばかり思っていたものの中に、新しいことがらが見えてくるのですが、そのことを「異化」と考えてよいと思います。です

から、大学でこれから学んでいくという時に、この「異化」ということを念頭に置けば、これから皆さんが新しい考え方に出会ったり、あるいは自分で意識してこれまでの見方を変える工夫することができ、普段の身の回りに起こっている見慣れたことがらが新しい意味を持って見えてくるということがあると思いますので、ぜひそうして欲しいのです。

「異化」ということを考える時、分りやすい例として、有名な科学者であるガリレオのことがよく言及されます。ブレヒト自身、ガリレオをテーマにした作品『ガリレオの生涯』を残しています。ご存じのように、ガリレオは、それまでずっと信じられていた天動説に対して、コペルニクスと共に初めて地動説を唱えた人です。発想の転換と言いますか、日が出て日が沈むという毎日の見慣れたことがらを、違った視点から見るということは「異化」ということを端的に示しています。ブレヒトもそういうガリレオの生涯を通して「異化」ということを伝えようとしたのでしよう。

仏教に出会うということも、皆さんにとってはこれまで気づかなかった新しい考え方・視点に出会うことです。それによって普段に皆さんの身の回りで見えているものが別な風に違った意味を持つて見えてくるのではないのでしょうか。ですから、これから仏教を学んでいくということも、今お話したような「異化」というところから見れば、みなさんの学び全体の中に位置づけられるように思います。

## 二 仏教は他の宗教とは異なる

仏教は一つの宗教であると捉える事が出来ます。そして特に世界の三大宗教として、キリスト教、イスラーム教、仏教とよく言われますが、その時に、では同じような形態を持った、本質的にそれほど変わらない宗教であると考えられるのかと言えば、それはそうではないと思います。その違いというものを最初に考えておくことは重要です。それ

が結局は仏教の特色ということになりますし、仏教の学び方ということに直接つながっていくことになるからです。

仏教以外の宗教、キリスト教、イスラーム教、そして仏教が興った国インドで大勢を占めているヒンドゥー教もそうですが、これらの宗教ではこの世界の創造主である絶対的な神の存在を認めています。その神が、ある人間をメッセンジャーとして選び、その人を介して神から人々に神の意志、真理が示されます。それはことばを通して示されませんが、同時に苦しみの中にいる人々を救済する約束ともなっています。それに対して、それを信仰する人々は、絶対的な神を信仰することによって自分が救済される、すなわち「魂の永遠の平安」が約束され、獲得されることになりました。このような宗教は、いわゆる、「啓示宗教」と呼ばれるものに属するものです。世界の大きな宗教のほとんどはこの啓示宗教というもので、預言者（神の言葉を預かった者）、例えばキリスト教では、イエス・キリストが神の子であると同時に預言者でもあると考えられています。そして、そのメッセージとしての内容が「聖書」として残されています。イスラーム教の預言者はムハンマドという人で、そのメッセージの内容は『コーラン』という聖典になっています。ヒンドゥー教は、預言者に当たる人は複数の人たちが考えられています。リシ（聖仙）と呼ばれる人たちです。その人たちが神のことばを聞いて記憶にとどめたもの、それが「ヴェエダ」と言われています。そのように、これらの宗教は神のお告げ（啓示）、真理、そして救済の約束を預言者を介して人々に伝える、そういう内容を持っていると思います。それらは啓示されたものですから、神のことばでもありません。そして、この神のことばはやはり絶対的な真理ですから、そのことばを疑ったり批判したりすることは基本的に許されません。それを絶対的なものとして受け入れることが必要なこととされています。今、例えばイスラームの世界で原理主義と呼ばれている、イスラームの本質的なものを強く打ち出している人たちは、この神の啓示、神のことばの真理性を強調していると思います。絶対的な真理として受け入れ、批判はすべきではないという形が強く出されているようです。

このように、仏教以外の宗教は主に啓示宗教であると考えられますが、では、それに対して仏教はどうかと言いま

すと、仏教は創造主である絶対的な神を認めません。それでは宗教の大きな目的の一つである救済はどうして得られるのか。仏教では救済という言い方はあまりされませんが、それに似た表現をすれば、「各人が自ら真理に対して覚醒することによって、迷いや苦悩から解放される」ということになるでしょう。それは心の平安を得るということになりますから、救済と呼ぶことも可能でしょう。仏教的な表現をすれば、それは「覚る」ということであり、「覚りを獲得する」「ブツダに成る（成仏）」ということです。ですから、神の恩寵と言いますか、神の関与によって自らが救済されていくのではなく、ブツダの教えに基づきながら自分自身が真理に対して覚醒する、真理をはっきりと了解する、すなわち、自分で覚りを獲得することだと考えられます。

「仏教」という語の意味を強いて解釈すれば、「仏」と「教」と分かれます。「仏」はブツダ、釈尊という人で、非常に偉大な私たちの先輩、一人の先達と考えることができますが、絶対的な神ではありません。その先達であるブツダによって説かれたブツダになるための「教え」が仏教であると言えます。私たち自身が覚りを得るための教えと考えることができます。ですから、時に、「キリスト教では信徒は神にはなれない、救済はされるけれども神自身にはなれない。ところが、仏教では誰もがブツダになれるし、ブツダに成る（成仏する）」ということを目的としている」と、そんなふうに言われることがあります。これは少し極端な言い方ですが、内容的には、仏教は各人がブツダになることを目的とし、そして釈尊という人はそれを実践した偉大な先達であると考えることができると思います。そうすると、ブツダ・釈尊の教え（仏教）は無批判に受け取るのではなく、各人が自分で吟味し納得することこそが求められ、批判的に見ることが求められることになります。したがって、仏教は誰に対しても開かれたものであり、批判にさらされ批判の対象とされるということでもありません。そのことは後でもう少し詳しくお話しします。

## 〈アンベートカルという人〉

仏教と仏教以外の宗教の違いというのは、あらまはしは今お話ししたようなことですが、ここで、アンベートカルという人を取り上げながら、もう少し仏教と他の宗教の違いということを考えてみましょう。アンベートカルは、知っている人もいますと思いますが、ガンディーと共にインドの独立運動に深く関わった政治家で、インド憲法の起草者の一人です。主に活躍したのは第二次世界大戦前後から、インドが独立する前のことです。彼は不可触民の出身です。不可触民とは、インドには四つのカーストがありますが、その中のどのカーストにも属さない、アウト・カーストの人たち、非常に強い差別を受けることが多い人たちです。アンベートカルはその不可触民として生まれたので、小さい頃からさまざまな差別に出会ってきました。しかし、非常に優れた人でもあったので、勉学に励み、また、機会にも恵まれて、アメリカやイギリスに留学して近代的な学問を修めることができました。彼はインドに戻ってから、自分と同じ境遇の人々を解放する運動に取り組んでいきます。彼は、最初、差別を受けながらも自らが育ったヒンドゥー教の枠内で差別をなくしていこう、自分たちを解放していこうとします。当時、彼と同時代で有名な人に、皆さんもよく知っているインド独立の父と言われるガンディーがいます。そのガンディーもやはりヒンドゥー教の枠内で被差別民の解放ということを考えていたようです。ですから、最初のうちは彼ら二人は互いに協力します。

しかし、そのうち、アンベートカルはヒンドゥー教の根本的な考え方、つまり、神によってそれぞれの人の役割は決められていて、それぞれのカーストの人にはそれぞれの義務があり、下のカーストの人たちは上のカーストの人たちに奉仕するのが本来の義務であり、そしてその義務を全うすることが救済につながるという考え方に大きな疑問を持つようになります。ヒンドゥー教の枠内で解放ということを考えると、どうしてもその考え方の根本のところに基づいてしまいます。そして、ついに彼は、ヒンドゥー教の枠内では自分たちの解放は不可能だと自覚します。これに対して、ガンディーは最後までヒンドゥー教の中ですべての問題を解決しようとし、そしてそれは可能であると考

えていました。そのため、二人は急速に対立するようになっていきます。その後、アンベードカルは、一九五六年、自分と共に解放運動をしている人たちを引き連れて、ヒンドゥー教に見切りをつけ、仏教に改宗します。しかし、仏教徒として活動しようとしている矢先に亡くなり、仏教での解放運動は十分展開しないまま終わります。

このように、アンベードカルはインドの中で自分たちの状況を踏まえながら、仏教を見つめた人です。ですから、インドのヒンドゥー教と対比したり、あるいは彼自身がイギリスやアメリカにも行って学んだりしていますから、キリスト教というものもある程度知っていたと思いますが、そういう中で、仏教に出遇って仏教を見た時に、他の宗教とは違うということがよく見えてきたように思います。彼は仏教に改宗後、自らの解放運動の基本的な立場として、自らの仏教理解を明らかにするために、『ブッダとそのダンマ』を著作します。これはアンベードカルの遺作となったもので、現在、日本語訳（山際素男訳『ブッダとそのダンマ』、光文社新書、二〇〇四）によってそれを手軽に読むことができます。この本は、彼が仏教徒になって、仏教とはどういうものか、自分の理解したことをかなり細かく記したものです。いろいろな視点から、いろいろな区分けをしながら仏教全体を語ろうとしています。本書は、出版後、その仏教理解に賛否両論が渦巻いたようで、仏教徒や仏教学者からも多くの批判を受けています。私たち仏教を学んでいる者から見ますと、中には、誤った捉え方、あるいはこれまでの伝統的な見方とは違った見方をしている部分も確かにありますが、仏教というものの基本的な捉え方、特に他の宗教と比べた違いということを論じている部分は鋭い見方を示していると思いますし、私自身もこれを読んで共感するところがありますので少し紹介します。

『ブッダとそのダンマ』では、仏教について次のように述べています。

ブッダは自分が預言者だとも神のメッセンジャーだとも決していっていない。彼はそう呼ばれることを断固拒否した。そして、さらに大事な点は、彼の宗教が発見であるということである。天啓といわれる宗教とははつきり区別されるべきである。彼の宗教は、人間が生れ落ちた時から持っている本能の働き、歴史や風俗習慣の所産と

して人が形成し、マイナスにも働く本能及び性向の型などへの深い洞察の結果生じた発見なのである。(山際訳一四七頁)

仏教は、天啓(啓示)宗教ではなく、真理の発見である、それも人間についての深い洞察の結果生じた発見であると言われています。私たち人間がこの歴史や風俗習慣(文化)を造っていく中で積み重ねたものの中に潜んでいることとが、そこに私たちの迷いや苦悩を生み出す原因があるのですが、そういうことに目を向けて深い洞察をした結果の発見であると言っているのです。その言い方はおもしろいし、仏教の正しい面を言い当てているように思います。

もう一つ、仏教の大事な面を指摘している箇所をあげておきます。

いかなる宗教の開祖も自分あるいは自分の教えに神性を要求する。モーゼは彼自身に神性を求めなかったが、彼の教えには神性を要求した。彼は信者たちに、もし乳と蜜の国に行き着きたければ、エホバの教えである自分の教えを受け入れよといった。キリストは自ら神の子を名乗り、当然ながらその教えは神聖なものとされた。クリシュナは神そのものだといひ、ギーターはその神の言葉だといった。

ブツダは自分自身にも自分の教義にもそのような要求をしなかった。彼は、自分は諸々の人間の一人であり自分の教えは人間に対する人間の言葉なのだと明言した。彼は自分の言葉の不謬性など決して求めなかった。彼が求めたのは、彼の言葉は彼のさとした救済に到る唯一真実の道だ、ということであった。そしてそれは人間の普遍的经验に基づき、誰しもがその教えに疑問を持ち、確かめどのような真実が潜んでいるかを見出すことができるものだといった。自分の宗教をかくも大胆に挑戦にさらした開祖はかつて存在しない。

(山際訳一四九―一五〇頁)

アンベードカルは、ブツダは自分がひとりの人間であり、自分の発見した救済への道は誰しもがその教えに疑問を持ち、自分で確かめ、どのような真実が潜んでいるかを見いだすことができるものであることを、ブツダ自身が言っ



ていると述べています。そしてさらに、「自分の宗教をかくも大胆な挑戦にさらした開祖はかつて存在しない」と、非常に強い口調で仏教の特徴を言っています。このことは、ブツダ自身が自らの教えに対して疑問や批判を拒まないこと、批判を受け入れるということでもあることでしょう。しかし、疑問や批判を拒まないけれども、ブツダは自分の教えが真理であるということには強い確信を持っていたことは間違いありません。仏教は批判を恐れないし、批判に対して開かれたものであることをアンベードカルは見抜いていると思います。

それでは本当にかどうなかを実際に仏教の中に探ってみたいと思います。

### 三 仏教における真理とは？

仏教における真理というのは何かということを考える中で、仏教が真理に対してどのような態度を取っているかが見えてくるでしょう。仏教は批判を受け入れ批判を恐れないと述べましたが、逆に仏教を学ぶ側からすれば、仏教は私たちに批判的な態度を持つて学び自ら納得することを求めているということにもなります。そのことについてお話しします。

#### 〈自灯明・法灯明〉

ブツダはさまざま表現を用いて、自ら発見した真理を教え（法）として説いています。仏教を学ぶ者は説かれたその教え（真理の法）を依り所にして学ぶことになりましたが、その場合、その教えを無批判に受け入れてはいけません。最終的には必ず各人がそれぞれ自分で確かめ、納得しなければならぬということが言われます。ブツダ自身がそのことを求めていたことは次のようなブツダ自身のことばによって知られます。ブツダは亡くなる（入滅する）前に、次のように弟子のアーナンダに話しています。

アーナンダよ、今でも、私の死後でも、自らを鳥（あるいは灯明）とし、自らを依り所とし、他者を依り所とせず、そして法を鳥（あるいは灯明）とし、法を依り所とし、他者を依り所としないものは誰であれ、彼ら私の比丘たちは最高の境地にあるであろう。

（『マハーパリニッパバーナ経』）

これはブツダが死を間近にして自分の死後の仏教の学び方を弟子たちに言い残したもので、「自灯明・法灯明」と呼ばれて、古来から有名なものです。ここで喩えとされている鳥あるいは灯明と言われるものは、それに対応するものが念頭にあるわけです。それは迷いや苦悩という私たちの輪廻の世界、それが海あるいは闇に喩えられています。それに対して、自分自身「の智慧」が大海の中の鳥であり、ブツダの教え（ブツダが発見した真理）というものが、大海の中の鳥とされます。その鳥は私たちの安息の場所、依り所です。それを依り所として確実な形で生きていくことができる、そういう場所が海の中の鳥と言えるでしょう。また、灯明とは、私たちの輪廻の世界を闇に喩えて、自分自身「の智慧」である灯明が、そしてブツダの教えである灯明がその闇を照らす、闇を打ち破るということを言っています。そうしますと、ここで鳥とか灯明とされているものは学ぶ者自らであり、ブツダの法であって、ブツダ自身ではありません。学ぶ者自らを、そしてブツダが発見した真理、それを依り所としなさいと言っています。そして同時に、他者を依り所としてはいけないとも言っています。この他者というのはいろいろに考えることができますが、ここでは絶対的な権威者として無批判に信奉されるような者を意味しているでしょう。したがって、この他者には、絶対的な権威者とみなされたときのブツダも含まれるであろうと思います。

それでは、「自らを鳥（あるいは灯明）とし、自らを依り所とし、他者を依り所とせず」とはどんなことを言おうとしているのでしょうか。「自ら」というのは、学ぶ者自らであり、さらに言えば、学ぶ者自らの智慧、自らの理解、教え（真理）に対する批判的な態度を通して自分で獲得したものを意味しています。そのような状態の自分がここでの「自ら」ということになると思います。それは、仏教的な言い方をすれば、自ら獲得した智慧ということであって、

他者から機械的に、無批判に得たものではなくて、自らがブツダの教え（法）を吟味して自らが得たもの、それが島となり、灯明となり、それこそが依り所であるということと重なり、仏教における真理の特徴、あり方をブツダ自身が表明した先に紹介したアンベードカルの言っていることと重なり、仏教における真理の特徴、あり方をブツダ自身が表明したものであると思います。

そうしますと、今日の話のはじめのところ、仏教の特徴は「自ら真理に対して覚醒すること」であると表現したこととつながっていきます。ブツダが残した教え（法）は、例えば經典などの文献として残されているわけですが、それは、そのまま無批判に受け入れられることが求められているのではないわけです。これらの教えを必ず自分でよく考えてみなさい、そして、なるほどそうだと言った時に、それは自分で獲得した、自分で見出した智慧になるということとです。その智慧を獲得することが仏教を学ぶということになっていくのです。ですから、仏教を学ぶということは、まさに、自ら吟味し、自ら批判的に捉え確かめることです。ブツダの教えを無批判に受け入れるのではないということが強く言われていることとなります。

### 〈仏教における真理の一例―無我―〉

仏教の真理の一つとして「無我」ということが言われます。これは非常に難しい内容ですが、仏教の真理に対する一つの向かい方、アプローチの仕方のお話します。

私たちは生まれてから、経験を通して自分（自我）というものを形成し、自覚していきます。そのような自覚が自分の中で習慣化されていく中で、「私」というものの存在や「私」と違った「他者」たちの存在を確かかなものと考え、「私」と「他者」を区別してお互いの関係などを考えていきます。そして、「私」「他者」という観念は、知らない間に自分の中に深く入り込んでいきます。そういう中で、私たちは、ある教え、例えば「靈魂は不滅である」、あるいは

「私というものは実在する」という考え方に遭遇したりします。その考え方が宗教的・哲学的に確かめられたりしますと、それを正しいものとして受け取ることが起こるでしょう。そのような時に、仏教は、「本当に私は実在するのか」ということを吟味し考えようとしています。自我は私たちが知らない間に実在すると思いつ込んでいるだけではないかと、仏教はそのことを取り上げて考えようとしています。

例えば、ブッダの教えの一つに「すべてのものは一瞬一瞬に変化していく（諸行無常）」ということがあります。そのことを深く理解できれば、すべてのものが変化するのであれば、私というものも例外ではなく、変化するものであることが分かります。私というものは今まで確実に存在すると思っていたけれども、変化し年を取りながら、やがて死んでいきます。そうすると、その中で私という存在は変わらないと考えること、実在することを当たり前と思うことで良いのかということになっていきます。

さらに、経典には、「私」というものは無常な心と身体が集まったものに対してことばの力を借りて仮に設定したものにすぎず実在するものではない、それはちょうど「くるま」というものが車輪や車体などの集まったものに対して仮にことばで設定されるようなものである、ということが説かれています。そのことを吟味していくと、実は「私」というものは自分が生きていく中で、いろんな経験をする中でことばを使って造り上げたものではないかということが見えてきます。

そんな風に、経典に依拠しながら自分で考えていきますと、「私」というものの真相、すなわち、恒常的で不変な「私（自我）」は存在しないこと、「無我」であるということがはっきりと見えてきます。「無我」はブッダが伝えようとした大事な真理の一面ですが、それを自分で確かめていくのです。大事な真理については経典や論書自身が詳しく説明・論証してくれていますから、そういうものを読むことによって、「ここで言われていることは本当にそうなのか、矛盾はないのか」と自分で批判的に考えていくことができます。そうすれば、無我ということが、その通りに分

からなくても、そこで議論されていること、言おうとしていることの一端が見えてくると思っています。その時、私たちが当たり前だと思っていた「私（自我）」ということに対する捉え方が今までとは違ってくるはずですよ。

このように、仏教の真理というものは、それと直接向き合い、批判的に吟味するということが求められています。そして、そのような批判的な仏教の学びを通して、私たちは身近でありふれたことに対する新しい視点を得ることにあります。そして、その新しい視点によって、今まで知らない間に私たちが自覚に執られているか、いかに自我を前提としてもを見たり考えたりしているかということが見えてくると思います。

### 〈仏弟子プールナ〉

そこで、最後に、無我とのつながりの中で、プールナという仏弟子の忍耐のことをお話しておきたいと思えます。プールナという人は釈尊の直接の弟子の中の有名な一人です。彼は自分の生まれ故郷に戻って、仏教を広めようとして釈尊のところに別れの挨拶にいきます。プールナが釈尊の前を去ろうとする時、釈尊は彼に声をかけます。彼の心（智慧）のあり方を確認しようとしたのです。

プールナの生まれ故郷は非常に荒々しい気質の土地柄であったようですから、プールナが説法をする時に、土地の人たちが非難したり暴力をふるうようなことがあるのではないかと釈尊は危懼したということもあって、釈尊自身がプールナの心を確かめます。

釈尊は尋ねます。「プールナよ、おまえが行こうとしているところは非常に荒々しい土地柄であって、多分おまえが説法をしようとすると、相手はおまえを口でののしり、辱めるようなことを言うだろう。その時におまえはどうするか」

その時、プールナは答えます。「彼らは善い人たちです、私を手で打ったりしないから、と思います」

そこで釈尊はさらに「それでは彼らが手で打つたらどうするか」と尋ねます。

プールナは「彼らは善い人たちです、棒で打たないから、と思います」と答えます。

「それでは棒で打つたらどうするか」

「彼らは善い人たちです、刀で斬りつけてこないから、と思います」

「それでは刀で斬りつけてきたらどうするか」

「彼らは善い人たちです、命を奪わないから、と思います」

釈尊は最後に「それでは命を奪われたらどうするか」と尋ねます。

その時、プールナは答えます。「私はいずれ死ぬ身ですし、中には自殺をする人もいます。ですから私を殺してくれる人があればありがたいと思います」

そこで釈尊は「それほどの忍耐（じんにかく忍辱）があれば、おまえはそこへ行っても大丈夫である」とプールナの心持を認めます。

（『中部経典』一四五取意）

この場合、プールナが非常に忍耐強い人だと考えることももちろんできますが、これはプールナ自身が仏教の核心部分を自分で了解していると考えることが妥当でしょう。彼は先ほどの無我ということ、すなわち、自我に執られないということを完全に了解していると思います。もし、自我というものに執われていれば、自分に危害が加えられた時、相手に反撃もするし、相手を憎むことにもなります。自我に執われないことは本当に難しいことですが、プールナはそのことが完全にできていたように思います。仏教の真理に触れそれを自ら了解する時、私たちから見て想像し難いことや考え及ばないことでも、平然と、たんと受け入れられるものであるということが知られます。

#### 四 仏教を学ぶとは？

最後に簡単な形にとどめますが、仏教を学ぶということについて述べておきます。ブッダが残してくれた教えは真理を伝えているものですから、それを依り所にすることは私たちにとって当然大切なことです。しかし、それをただ絶対的に無批判に受け入れるだけでは、ブッダ・釈尊が求めていることでもないし、仏教を学ぶということでもありません。それを自分自身で確かめることが不可欠なわけです。ただ、それを自分で確かめる時に、自分だけで考えて了解することはなかなか難しいことです。しかし、それを確かめる材料が仏教の中に豊富に伝えられていますから、私たちはそれらを利用することができます。釈尊以来の仏教の歴史の中で多くの仏弟子や仏教僧たちが先達の教えに導かれながらどのようにそれを確かめるべきであるかを伝え残してくれています。例えば、勝れた仏教僧たちが仏教の真理の確かめをした証しとして、仏教の論書が残されていますし、経典そのものにも、釈尊自身が確かめの方法をいろいろと示してくれています。そういうものを手がかりとして、私たちは仏教の真理を自分で確かめることができますし、また、そうすることが求められているのです。そういうふうにして確かめられたものは、自分のものになりますし、自分の生き方とつながっていくことになります。ですから、仏教を学ぶということは、最終的には自分の生き方とつながった形で、日々の生活の中で仏教の真理を確かめることでもあると思います。

以上、分かりにくい部分もあったと思いますが、要は、仏教を学んでいく時の基本的なことは、自分で確かめることです。その際、その確かめの仕方は仏教の文献の中にいろいろな形で示されていますから、それらを利用することが必要となります。そのためには、今後、皆さんは仏教の文献に積極的に触れていって欲しいと思います。